

城下町探訪 5

2009/4/30

たつみごてんあと 辰巳御殿跡

大名町から四柱神社境内を抜け東進すると緑町の通りにぶつかる。その手前北側に「辰巳の御庭」と名付けられた公園がある。ここは旧松本藩「辰巳御殿」の一部に当たる所である。昭和53年8月緑町住民の総意によって造られた公園である。

天保6年（1835）「松本南北深志絵図」によれば、辰巳御殿の位置には西郷宇右衛門（250石）の屋敷がある。この屋敷が辰巳御殿になるわけであるが、屋敷の東側は東総堀で土塁が築かれその上には土塀が設置されていた。この東総堀が明治になってから埋め立てられ緑町が成立していく。

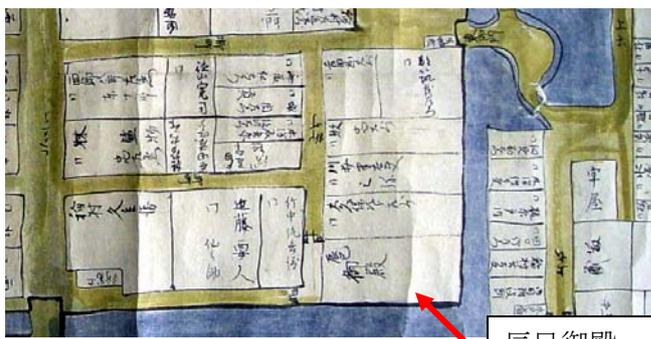
辰巳御殿は誰のためにつくられたかというと戸田^{みつひさ}光則の父光庸（みつつね）が、弘化2年（1845）わずか治世9年で隠居したため日常の住居として造られたのである。

光庸は弘化2年10月21日病気を理由に隠居を願い、聞き届けられている。時に48歳であった。旧松本市史（昭和8年刊）によれば隠居は内実は幕府の命に基づいたものであった。外国船が浦賀に来て内外多事で財政が逼迫しているおり幕府においては大老水野越前守忠邦の節約緊縮令が出ている。松本藩もこれに習っていたが、光庸自身は奢侈に流れ、また天保13年の天守の修復、弘化2年の郭内総堀・北西外堀の浚渫など不急の土工を起し農民の不平を招いた。また、戸田^{きい}図書事件が起こり家臣統治の不始末等幕府の忌諱に触れたためであるとしている。



田中薫著「シリーズ藩物語松本藩」によれば天保14年松本藩領偽金造りが発覚し計8人が幕府に捕縛された。光庸はこの偽金作りが領内の出来事であった事を「無念」として幕府にお伺いを立て10月朔日まで「御差控え（自宅引き籠もり）」の謹慎している。このような領内の事件も隠居に関係しているのではないかとしている。

光庸は隠居後、嘉永6年（1853）江戸から松本に移り、辰巳御殿に悠々自適の生活を送った。家督は弘化2年10月22日18歳の光則がついでいる。香齋あるいは谷神と号し詩書を事とした。明治5年光庸は東京に移り須崎の別邸にあり、明治11年9月4日81歳で逝去された。東京染井墓地に葬られている。
 (光庸の筆跡)

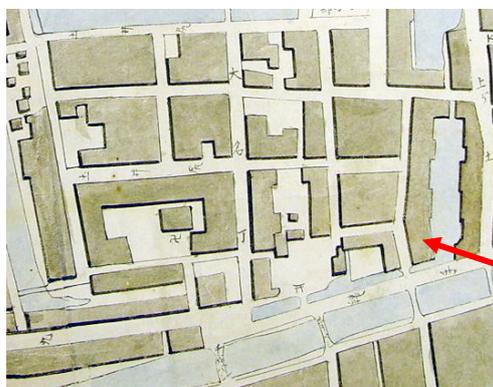


「安政三年~文久元年家中屋敷図」より

辰巳御殿



明治5年松本侍町絵図よれば辰巳御殿の位置は野々山則吉の屋敷になっている。



右図は明治31年東総堀の埋め立て状況を示している。
 現緑町の通りが造られ東総堀が両側から埋め立てられて町が広がっている様子がうかがえる。

現在のところ辰巳御殿の様子がわかる資料は僅少で実態がよくわかっていない。

旧辰巳御殿